

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520321

研究課題名（和文） 恋愛・結婚をめぐる異文化交流・翻訳の諸問題

研究課題名（英文） Issues Surrounding the Translation and Transmission of the Concept of “Love” and “Marriage” in an Intercultural Perspective

研究代表者

今野 喜和人（KONNO Kiwahito）

静岡大学・人文学部・教授

研究者番号：70195915

研究成果の概要（和文）：異文化間に生じる「恋愛」「結婚」を扱った世界各国の近現代文学、および「恋愛」「結婚」を語る諸言語テキストの影響関係や翻訳において発生する文化衝突と誤解を多角的に分析し、現代におけるナショナリティ・文化・エスニックグループ、ジェンダー・世代・ミリュウ等々の間の政治的・社会的支配／被支配の構造と歴史観を分析・検証することで、「異文化理解」にまつわる諸問題を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The goal of this project was to analyze problems of interpretation and cultural misunderstandings stemming from the translation as well as the intertextual influence of a multiplicity of modern literary texts in a variety of languages depicting love and marriage. We showed how the understanding of the concept of love and marriage in modern literature can improve our comprehension of political and social structures of domination and oppression between nations, cultures, ethnic groups, genders, generations, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 2009年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2010年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究代表者の専門分野：比較文学文化

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：比較文学

1. 研究開始当初の背景

近年、グローバル化の急速な進行にともない、かつてなかった勢いで、多くの異なる文化が接触・衝突する事態が生じている。異文化接触自体は、人類史上絶え間なく行われてきた営みだが、現代の問題に切実に関わるのは、成員の文化的アイデンティティーと密接な関係を持つとされる、近代的な「ネイション」あるいは「エスニック・グループ」の概念が成立した、19世紀以降の思想的な枠組み

だろう。近代において、均質な文化的アイデンティティーを共有すると見なされる成員からなる求心的なエスニック・グループが、政治的な主体としてのネイション・ステーツを成立させる必要十分条件として強調される一方、異なるエスニック・グループ同士の接触・交流は、そのアイデンティティーを揺るがし、再編成をも強いる特殊かつ重要な機会として、問題視されるようになってきた。中でも、恋愛・結婚問題は、こうした異文化

接触に関わる問題が最も先鋭化された形で現れると考えて良いだろう。また、19世紀後半、世界的に大流行した社会進化論や遺伝学、そこから発達した優生学は、恋愛・結婚から生じる「人種」的・文化的「混血」に対しても切実かつ両義的な関心を惹起した。こうした背景のもと、異文化接触は近代文学においても重要なモチーフの一つとなってきたが、これを男女間の「恋愛」「結婚」というテーマに即して描いた作品は、膨大な数に上る。これを分析することは、「異文化理解」のみならず、ナショナリズムや多文化主義のはらむさまざまな限界や問題点を明らかにすると共に、それを乗り越えて新しい異文化間交流のモデルを作り上げるためにも、必要不可欠なものと思われる。

応募者はいずれも特定の言語領域（日・中・韓・英・仏・独・西・露）における近現代の文学・思想を主たる専門領域としているが、異なる言語文化同士の接触・対立・吸収・相互浸透などに特に関心を抱いて研究を進めてきた。平成17年度には、所属学科内競争経費の配分を受け、当該メンバーによる「翻訳文化研究会」を組織し、異文化理解と衝突の微妙なありようがテキストの中に顕在化する「翻訳」について学際的・多角的な研究を行った。その成果を『翻訳の文化／文化の翻訳』（平成18年3月）として纏め、平成18年6月には川端文学研究会第33回大会（「川端文学——海外への展開」、於：武蔵野大学）においてメンバーの内の3名がこの研究を基に発表を行った。平成18年度には月例の研究会の他、詩人の野村喜和夫氏を招いて「旅と翻訳」と題する一般公開の講演会を行い、『翻訳の文化／文化の翻訳』の第2号も発刊するなど、研究成果の公開にも努めてきた。今回の研究はこれを引き継ぎ、「翻訳」概念をさらに拡大しつつ、異文化間に生じる恋愛・結婚、もしくは一般に恋愛・結婚をめぐる言説それ自体に生じる文化衝突の問題に焦点を絞って集中的な考察を行うべくなされたものである。

2. 研究の目的

異文化間に生じる「恋愛」「結婚」を扱った世界各国の近現代文学、および「恋愛」「結婚」を語る諸言語テキストの影響関係や翻訳において生じる文化衝突と誤解を分析し、現代におけるナショナリティ・文化・エスニックグループ・ジェンダー・世代・ミリュー等々の間の政治的・社会的支配／被支配の構造と、「異文化理解」にまつわる諸問題を考察する。

3. 研究の方法

本研究では異なる文化に属する男女の「恋愛」「結婚」を扱った近現代文学やその周辺のテキストを対象とし、この一見極私的に思

われるテーマに織り込まれた、エスニック・グループ間の政治的・文化的な支配・被支配関係や歴史観を分析・検証することを第一の目的に据えた。これらのテキストにおいては、作者および登場人物のいずれかが属するエスニック・グループもしくは文化（西洋・東洋はもちろん、ジェンダー、世代、ミリューも含む）の視点から、彼らにとっては異質な文化が記述されるが、そこでは不可避免的に相手の文化が自文化の言語・価値観によって「翻訳」されることになる。また、必ずしも異なった文化に所属する者同士の恋愛を直接扱っていなくとも、文学的・思想的影響や翻訳を通じて、恋愛をめぐる言説そのものが、すぐれて文化衝突の切実な問題を提起することがある。このプロセスを比較文学・比較文化・カルチュラル・スタディーズ等々の手法を通じて多角的に分析した。

具体的に本研究が取り上げたのは、19・20世紀に書かれた、異文化に属する（とされる）男女間の（同性間も含む）恋愛・結婚を扱った多様なテキスト、および文学的影響や翻訳によって恋愛言説そのものの中に文化間衝突が顕在化するテキストである。地域的には日本・韓国・中国・フランス・アメリカ・ドイツ・ロシア・ラテンアメリカを中心とし、小説、戯曲、詩を対象として研究を進めた。ここで登場する「恋愛」「結婚」は、これらの文化の内部や、文化間相互に生じたものである場合もあるし、これらの文化とここには挙がっていない他の文化の成員間のもを扱っている場合もある。またある言語で書かれた作品が他の言語に翻訳され、その翻訳を通じて影響関係が生じるに際し、そこに描かれる「恋愛」「結婚」そのものが解釈され、変質してゆく可能性を論じた場合もある。

七名からなる応募者グループは国籍も異なれば、専門とする地域、所属学会、使用言語も異なるメンバーによって構成されている。したがって、一国に限定されずに、広く各国語で書かれたテキストを分析できることが応募者グループの最大のメリットであり、この利点を生かして各国における、さまざまな言説を複合的に論じることによって、ワールドワイドな成果を上げることを目指した。

実際の研究にあたっては国内外の関連文献を渉猟し、毎月の公開研究発表、他大学の研究者を含めた研究集会や資料交換を通じて、この問題へのトータルで細密な視点を共有しつつ行った。これらの研究については、それぞれの所属する学会において発表機会を求めたほか、既に平成17年度から開始している翻訳文化研究会の活動から生まれた研究誌『翻訳の文化／文化の翻訳』の刊行を継続し、最終的に平成22年度末に今回の研究の総特集号として発刊して各方面の批評

を仰ぐと共に、既存の学会組織では得られないような研究成果の集約と公開を行った。

4. 研究成果

以下、代表者および分担者ごとの成果を述べる。

(1) (今野) 研究全体の方向を定めるべく、理論的枠組みの精妙化に努力したほか、明治期のフランス文学翻訳者長田秋濤の訳業『椿姫』における恋愛表現の分析を行った。この作品中には動詞 *aimer* を用いた恋愛表現が数多く現れるが、長田がどの訳語を採用したかを逐一検討し、現代にいたるまでの他の翻訳とも比較した。そこで顕わになったのは明治以降、翻訳文学の影響による「愛」「愛する」という日本語の膨張という事態であり、一面では日本語の伝統的恋愛表現の消失という側面にも繋がることが示された。

(2) (田村) 「恋愛抒情詩の比較研究—アフマトワと俵万智—」というテーマを設定し、20世紀初頭のロシア詩壇に華々しく登場したアフマトワの短詩と俵万智の現代短歌との、時空間を超えた恋愛抒情詩としての共通性を詩の技法と表現の面から明らかにしようとしてみたが、具体的な比較に辿りつくまえの段階にとどまることになった。文献の蒐集と翻訳によってそれぞれの技法の特徴をつかむことはできたので、今後の比較文学研究において当初のテーマを論文にまとめてゆく。

(3) (南) 日本人と韓国・朝鮮人における内鮮結婚・内鮮恋愛の言説を収集、整理し、日本と韓国・朝鮮における恋愛と結婚をめぐる政治性を明らかにした。とくにアイデンティティの帰属問題、言語の問題、性差による差別と被差別の構造を植民地主義の普遍的な問題に還元させ、日韓における恋愛・結婚がもつ根源的な構造を明示した。

(4) (桑島) 本分担研究では、中国近現代文学に描かれた国際結婚を通してセルフ・オリエンタリズムの問題を考察したが、浮かび上がってきたのは、内面化された西洋のまなざしとどう向き合うか、苦闘する作家たちの内実である。近代文学が中国に移入された1910年代以降、絶えず突きつけられる、こうした問題に焦点化することによって、中国文学・文化の本質の一端が日本や他のアジアの国家と相対的に明らかになったと考えられる。

(5) (花方) 3年間の科研費を利用して、19世紀キューバ文学においてナショナル・ロマンス小説を書いたヘルトゥルディス・ゴメス・デ・アベリャネーダに関する資料を中心に、ナショナリズムやそれと結びつく恋愛・結婚の表象に関連する文献資料を収集した。また旅費を利用して、2009年度にはキューバに出張、現地調査を行った。これによって日本ではほとんど研究されていないこの

女性作家に関する欧米の研究成果を利用しながら、19世紀キューバの文化的・社会的・政治的・経済的状況を浮き彫りにすることができた。その成果は研究成果報告書掲載の論文にまとめたが、今後も収集済みの資料を利用して、随時研究成果を報告発表してゆく予定である。

(6) (山内) 20世紀後半のアメリカを代表する伝説的な画家として知られるジェス (Jess, 1923-2004) と、詩人のロバート・ダンカン (Robert Duncan, 1919-88) の恋愛関係に関する研究を行った。サンフランシスコのゲイ・コミュニティを拠点に活躍した芸術家カップルの研究を行ったので、一般的には我が国では知られていない事項がかなりあったが、現地調査をはじめとするリサーチを行うことにより、アメリカ本国でも未紹介の事実を多々つきとめることができた。それらの発見を記した成果報告書中の論文「20番通り3267番地のナルキッソス」の成果を礎とし、今後はさらにアメリカの文学文化と社会情勢をめぐる発展的な研究を進めていく予定である。

(7) (エゲンベルク) 「恋愛」という複雑な感情は、生活においても文学作品においても、常に或る独特なものに依存している。それは、つまり、我々を言葉のように強く捉えるけれども意識に上ることはめったにない「雰囲気」というものである。この「雰囲気」というものは、感情や葛藤を文学的に表現する上で、中心的な役割を果たし、言葉の作用のみならず、その場における事象、風景、身体的表現、記号的表現といったことにより意味論的・象徴的に醸し出されるものである。更に、雰囲気に埋め込まれた出来事は、それが各々の文化のコードに依存しているが故に、特別の深層次元を受け取るものでもある。この研究プロジェクトでは、近現代の代表的なドイツ語圏文学の作品を素材にして (Peter Handke, Botho Strauss, Paul Nizon, Gerhard Roth 著など) 「雰囲気」というものの機能を「出会い」、「想像・妄想」、「日常」、「言葉」、「セックス」、「空間」、「別れ」といったテーマに分けて体系的に分析した。

(8) 以上の成果については毎月の研究会を通じて相互に検証し、『翻訳の文化／文化の翻訳』等における発表を通じて学会および社会に還元できたと思われる。また、今野と田村は所属学科における『翻訳論』の授業において、研究成果の一端を学生の教育にりようした。

と同時に、メンバー以外の講演会としては、平成20年度に楊逸氏 (平成20年度第139回芥川受賞作家)、平成21年度によしもとぼなな氏、平成22年度にリービ英雄氏をお招きして一般公開し、それぞれ学生、一般市民を含めた多くの聴衆を集めて活発な質疑応

答がなされた。複数の言語文化が交錯する世界に生きる創作者の立場から、「恋愛・結婚」と「異文化理解・翻訳」に関わる貴重なエピソードが聴けたことは研究会メンバーにとって大きな刺激となった。ここで改めて確認できたことは、広義の「翻訳」が文化芸術領域のみならず、現代における人間と人間の交流のあらゆる場面で不可欠の役割を果たしているという事実であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 19 件)

- ① 今野喜和人、長田秋濤訳『椿姫』における恋愛表現をめぐって、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、6号別冊、2011、11-20
- ② 南富鎮、「内鮮恋愛」と「内鮮結婚」の文学、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、6号別冊、2011、35-60
- ③ 桑島道夫、衛慧『ブッダと結婚』に見る国際結婚とセルフ・オリエンタリズム、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、6号別冊、2011、61-66
- ④ 花方寿行、ゴメス・デ・アベリャネーダ『サブ』——19世紀キューバにおける二重の不可能な愛、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、6号別冊、2011、67-80
- ⑤ 山内功一郎、20番通り3267番地のナルキッソス—ジェスとロバート・ダンカンの世界を訪ねて—、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、6号別冊、2011、81-112
- ⑥ Thomas Eggenberg、Atmosphären – Zur literarischen Inszenierung der „Liebe“、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、6号別冊、2011、113-162
- ⑦ 南富鎮・鄭恵英、松本清張の朝鮮と韓国における受容、松本清張研究、査読有、12号、2011、110-123
- ⑧ 田村充正、「水晶幻想」論、国文学解釈と鑑賞、査読無、第75巻6号、2010、102-109
- ⑨ 田村充正、小説と映画のあいだ——〈山の音〉を聞かない信吾——、川端文学への視界、査読無、24号、2009、94-109
- ⑩ 山内功一郎、多孔質な平面としてのテキスト—Lyn Hejinian の My Life に生じる「わたしたちの意識の流れ」、シルフェ、査読有、2009、91-107

[学会発表] (計 5 件)

- ① 桑島道夫、關於李維英雄的中國表象 (原文中国語、「リービ英雄の中国表象をめぐって」)、日中青年作家会議 2010、2010、於中国社会科学院
- ② 山内功一郎、Louis Zukofsky の “A-9” について、日本英文学会第 82 回全国大会、

2010、於神戸大学

- ③ 花方寿行、国民性に「捏造」される風土——D. F. サルミエント『ファクンド』をめぐって——、平成 21 年度日本イスパニヤ学会第 55 回大会、2009、於静岡県立大学
- ④ 山内功一郎、ダンテとの対話—『神曲』とマイケル・パーマー、日本アメリカ文学会東京支部分科会、2008、於慶応大学

[図書] (計 3 件)

- ① 桑島道夫編訳・解説、現代中国青年作家秀作選、鼎書房、2010、1-210
- ② Thomas Eggenberg 訳、*Mein Körper weiß alles* (よしもとばなな著『体は全部知っている』)、Diogenes Verlag、2010、1-203
- ③ 今野喜和人・長谷川光明訳、マルティネス・ド・パスカリ他著、『十八世紀叢書 X 秘教の言葉』(国書刊行会)、2008、1-467

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今野 喜和人 (KONNO KIWAHITO)
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：70195915

(2) 研究分担者

田村 充正 (TAMURA MITSUMASA)
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：30262786
南 富鎮 (NAM BUJIN)
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：30362180
桑島 道夫
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：80293588
花方 寿行 (HANAGATA KAZUYUKI)
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：70334951
山内 功一郎 (YAMAUCHI KOUICHIRO)
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：20313918
トマス・エゲンベルク (THOMAS EGGENBERG)
静岡大学・大学教育センター・准教授
研究者番号：90447798

(3) 連携研究者

()

研究者番号：